

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

##### 《人社系》

#### ●東北大学教育学研究科総合教育科学専攻

##### 「実践指向型教育専門職の養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

今回のプログラムは大学院教育の改革であった。本研究科は研究者及び高度職業専門人の養成を目的としているものの、研究者養成に重点が置かれてきた。研究者養成を行うためには、既存の専門学会において研究業績を積み上げることが不可欠であり、そのためにはコースワークも学会志向とならざるを得ず、理論と実践とを結びつける高度職業専門人の養成は容易ではない。研究科全体として分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実はきわめて困難である。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

分野融合的な科目群、副専攻科目群等の設定はできなかった原因は、研究を志向する大学院教育の学問的風土である。この学問的風土は、日本の高等教育の文化でもあり、変容させるのは容易ではない。また、近年、円滑な学位授与が求められており、そのためには大学院の初年時から研究テーマを絞り込む必要がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

大学院生の視野が狭窄になることを回避するため、大学院生主体のプロジェクト型共同研究を研究科内で公募した。応募条件として、①現代的な課題に取り組むこと、②課題解決型の提案を行うこと、そして③研究チームが複数の専攻から構成されることを求めた。これによって、研究室の壁、研究方法の壁を越えて、共通の課題を追求するチームが編成された。大学院生の評判も高かったため、支援終了後は研究科長裁量経費を用いて継続している。